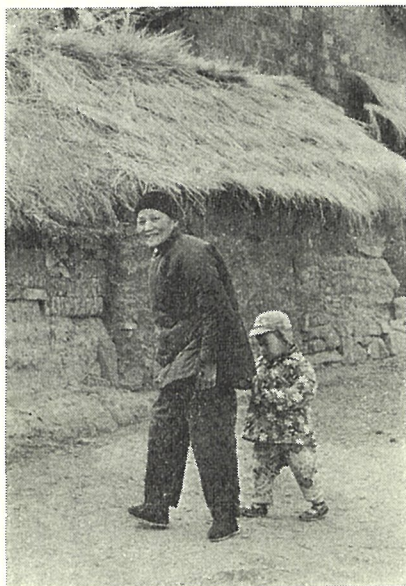


中国の旅

—江南の陶磁器と 博物館を訪ねて—

鈴木 重治



江西省の農村にて

省、浙江省を選んだ理由
者と交流するのが訪中の目
的であった。広東省、江西

水牛が小川のほとりや刈り取りのすんだ水田で遊んでいる。晩秋から初冬にかけての江南一帯は、稲刈りの最中である。列をなした農夫が鎌をふるっている。かたわらでは、刈り取ったばかりの稲を木製の唐箕を足で踏みながら脱穀している。広々とした水田がどこまでも続く。水牛の群、家鴨の群、瓦を焼く窯が車窓を走る。望楼を持つ古びた農村集落が丘の麓にかすんでいる。

三毛作の三回目の収穫だという稲刈りをまのあたりにして、日本の弥生文化の基礎となった水田耕作のふるさとに來たことをかみし

めた。このあたりの稲は、丈も短く、決してたわわには実っていない。まさに貧相な稲であって、品種改良

の進んだ日本の稲とは大きな違いだ。この大地に根ざした中国の文化の発展を、陶磁器を中心に考古学の立場から観察し、中国の研究

は、潮州窯、西村窯、景德鎮諸窯、龍泉窯、郊壇窯、修内司窯などの中国歴代の代表的な窯址群や著名な上海博物館、浙江省博物館、景德鎮陶磁館、江西省博物館、広州市博物館の豊富な資料に接したかったからである。更に江南の陶磁器の源流をさぐって、新石器時代からの土器群を点検するには、中国最古の土器群の一つといわれる寧波近くの河姆渡遺跡出土の資料も大きな魅力であった。日本各地で大量に出土している中国からの輸入陶磁器のうち、青磁、白磁、影青、染付を含めて、生産地での実体を知るのにかかせない重要な地域でありながら、考古学の立場での訪中が遅れている地域だからでもあった。

景德鎮の古窯址

景德鎮は、やきもののふるさといわれている。考古学の立場からの来訪は初めてだということで、各地で大歓迎をうけた。遺跡を廻る際にも専門家を案内につける配慮は嬉しかった。訪中する前に連絡をしていたとはいえ、景德鎮陶磁館の劉新閔氏のもとで、常に発掘調査の第一線にいる白焜氏がわざわざ時間をさいてくれた。



景德鎮黃泥頭窯址の遺物の散乱状態

南市街窯址は、鎮の南西約二十キロの獅子山の麓にあった。近くに釉の原石を産出する地点もあり、小高い丘の斜面に位置しており、嬉々として遊ぶ子供達の多い農村の一角である。遺跡には足の踏み場もない程、青白磁の破片が散在していて、貴重な遺物を踏みつけながら白焜氏が先頭に立って歩く。流麗な彫りのある青白磁の碗が多く、皿や壺の破片も目に付く。重ね焼きの製品や焼台の付着

したまま青白磁が陽光に照された様は、印象的であった。遺跡で手にとって見ることできる資料は、展示室でガラス越しに見る資料と違って、観察の上でより多くの情報が見られることもあって、我々にはまさに宝の山であった。この窯址は、五代に始り宋代に盛業期があると考えられているが、発掘調査が実施されていないことから、その実体については不明のところが多い。中国の研究者による発掘成果の待たれる遺跡の一つである。

南市街窯址から湖田窯址に向う途中、白焜氏が黄泥頭窯址を案内するという。胸のたかなったのを憶えている。景德鎮にある古窯址のうちでも、白虎灣、湖田、楊梅亭などとも重要な遺跡でありながら、外国人に公開されたことのない遺跡だけに、幸運であった。遺跡は、湖田の東方約二キロにある小学校の北側に接した道路脇の丘に存在していた。低い丘が東西に連なっていて、西側の丘に五代の窯址があり、東側の丘に宋代の窯址があった。五代の窯址には、青磁と白磁が多く、枯れ草の間に窯道具とともに散在している。にぶい発色の青磁の碗は、すべて輪高台であって蛇ノ目高台は一点もみない。白磁



景德鎮南市街窯址近景

の中には玉縁の碗があるが、すべての玉縁は小さく、肥厚した形態の玉縁はない。時代が限定されることを示している。器種は、碗、皿、壺、瓶、水注などであって、器壁の薄い輪花の碗も目についた。白焜氏によると、青磁は越州窯の、白磁は邢州窯の影響を受けていることが確実だという。日本出土の越州窯青磁といわれるものの中に、黄泥頭窯の製品が入っているのではないかと強く考えさせら

れた。畳付に数多くのトチ目を残している輪高台の青磁碗は忘れられない。

宋代の窯址は一段と高い位置にあって、時代による窯址の推移を示していた。いつのまに集ったのか、赤いネッカチーフの子供達にとり囲まれていた。くったくのない明るい子供達であった。

宋代から元代、明代までにわたって優品を製造していた湖田窯址もみる事ができた。人民公社の住宅街にとりかこまれた遺跡は、保全のために練瓦塀がめぐらされていて、遺跡の保護に留意されていることがわかる。同志社のキャンパス内から出土している影青の梅瓶の生産地を確認したのも成果の一つであった。元代の窯址には、天目の馬上環などが散っていた。明代の窯址を含めて近いうちに発掘調査にかかるため準備中だという。染付の起源に迫り得る遺跡だけに、その成果には国際的な関心がよせられている。

縄文土器の美体

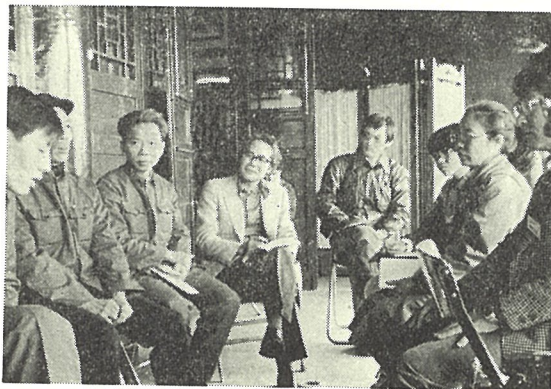
各地で遺跡や陶磁器を中心に見学したが、陶磁器の源流を確認するために、原始青磁の発展を春秋・戦国時代から東漢代の資料につ

いて比較することも、中国の旅での重要な作業の一つであった。

原始青磁の特徴は、釉薬が非常に薄く、焼成する窯の構造が馬蹄形であることであり、各地の研究者間で共通の認識となっていた。大きな問題の一つは、商代以前の土器であり、石器時代の土器である。江南の新石器時代については、河姆渡文化・馬家浜文化・良渚文化への発展が知られていたが、新しく確認された崧沢期の彩絵陶は、上海博物館の汪慶正氏によって特に強調されたものであり、絶対年代で五〇〇〇年前後にさかのぼるといふ。馬家浜文化と良渚文化の中間に位置するわけであって、最近北京で開かれた中国全域の新石器時代のシンポジウムで発表された由である。

新石器時代初頭に位置づけられる河姆渡文化の土器については、当然のことながら商代から西周時代にかけて盛期をみた印紋陶に先行するわけであり、浙江省余姚県河姆渡遺跡を標式として、六八〇〇年前後にさかのぼるものと考えられていたものである。また河姆渡文化に属する最古の遺跡として、最近江西省万年県大源公社内で発見された仙人洞遺跡

が知られている。放射性炭素の年代測定によつて一〇、八八五年プラスマイナス二四〇年の絶対年代が得られたものである。仙人洞では、人骨や打製石斧、磨製石斧、骨角器も見されていて、中国最古の土器と報告されている。江西省博物館には、仙人洞遺跡の展示コーナーがあり、丸底に近い長胴の深鉢や多くの土器片が収蔵され、虎牙、猪泉猴、羊齒



広州市立博物館での交流会

などの自然遺物や貝刃器などとともに展示されていた。仙人洞の土器片は、上海博物館にも展示されていて、中国最古の土器と解説されている。ここ数年來、上海博物館には日本の研究者が訪れており、何人かの研究者が、縄文土器の文様によく似ていると指摘した一群の資料である。これらの資料も、中国で見たいものの一つであった。

日本の各地で二十数年にわたって縄文土器を見つけてきた筆者にとって、新石器時代初期の土器の中国との対比は念願の課題でもあった。江西省博物館で仙人洞遺跡出土の土器を一点一点検討し得たのは倅せであった。多くの土器片には、細い縞り糸状の施文がみえる。中に条痕を認めるものがある。数段にわたって施文されているものもあれば、施文が重なり合っているものもある。中には刺突文さえある。これらの土器片の脇に置かれたラベルには「粗縄紋夾粗砂陶片」とある。観察したあと、江西省博物館の考古発掘隊員彭適凡氏に質問をつぎつぎにあげた。彭氏は心よく適確に答えてくれた。

「この粗縄紋の文様の付け方は、廻転して押圧したものではなく、叩きの技法によるものではないのか？」

「その通りだ。土器をよく観察している。日本人で叩きの技法を指摘したのは、あなたが始めてだ。」

「日本の縄文土器の文様の付け方は、廻転技法に特徴がある。中国の粗縄紋とは異質のものと考えているがどうか？」

「私も同様に考えている。日本の縄文土器は写真でも見たことがあるが、是非実物を見たい。」

浙江省博物館で観察することのできた河姆渡遺跡出土の資料についても、同様であった。文物管理委員会の考古工作員梅福根氏は、土器作りの技法としての叩き技法は、中国での伝統的なものと認識していた。河姆渡文化の土器も、日本各地にみられる縞糸文や爪形文ではなく、叩きや刺突によるものであった。刺突文の一部は確かに日本の縄文土器の一部の資料に極似している。また陶塑人頭と呼ばれる土製品が目についたが、これはまさしく土偶である。したがって一部に共通点があることは明らかである。これらのことから、土器については、縄文土器と区別する必要があるが、日本側から河姆渡文化の土器を呼

ぶ場合は「類縄文」として置くのが適當であろうと思われた。

このほかに中国の旅では、多くのことを見聞することができた。景德鎮には清代から生き続けている窯があり、現代もお補修しながら伝統的な技法を守って、陶磁器を焼造していること。各地で進められている建設のため、遺跡の調査が中国でも追いつかないことなどを知った。

日中両国の学術交流に加えて、市民的なレベルでの日常的な交流が盛んになることを心から願ってやまない。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)

付記

九月の初旬、同志社を会場として貿易陶磁研究会の研究集会が開かれた。その席上、特別参加した香港中文大学教授ジェイムス・ワット氏は、京都の北野廃寺から出土している青磁をとりあげて、景德鎮産と指摘した。従来越州窯産と考えられていた資料である。本文中に指摘した通り景德鎮黄泥頭窯は、越州窯の青磁に極似するものがある。景德鎮諸窯の公開に期待すること切である。